

かささぎ通信 第150号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2025年 8月 8日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

2025年7月の「森三郎の作品を読む会」では、

『赤い鳥』1934年2月・3月号の三作品を読みました。

「秋蟬」(2月)、「風船虫」(2月)、「ピアノ」(3月)

「秋蟬」は義務教育終了後の進路を決める時の、少年の心の揺れを描いています。義務教育と言っても尋常小学校六年を終える時のことです。森三郎は作品中でその後の進路について説明しています。男子の場合は、中学校へ行く者、高等科(二年)へ行く者、進学せずに家業を手伝ったり、職に就いたりする者と三通りがあります。

主人公の直(ただし)の場合は、秋の学期の初めに突然、先生が明日から中学校へ上がる者のために試験準備の予習をすると言い、中学校へ行く者は挙手をさせられます。直も無意識に手を挙げ、仲良しの敏ちゃんと一緒に中学校へ行く気になります。しかし帰宅して親にその話をする、中学校どころか高等科へも行けずに、卒業後は時計屋に奉公に行くことが決まっていると言われます。次の日に敏ちゃんに事情を話そうとしますが、敏ちゃんは二人で中学校へ行くことを想像して喜んでいきます。言い出せぬ直の耳に秋蟬の鳴き声が聞こえてくる場面では話は終わります。季節の終わりを告げる秋蟬の声は二人の少年の事情の違いと心の隔たりを象徴するかのようでした。当日の会では一様に、学校から事前の説明があつたなら、奉公先を決める前に両親から話があつたならと、十一・二歳で自分の意志とは関係なく生涯の道を定められてしまう少年の身を案ずる声が出ました。しかも直には友だちに本当のことを打ち明けることがまだ残されているのです。

三郎さん自身は尋常小学校六年間の後、高等科二年を終えました。卒業の前年の十一月の新聞で、新設の川上児童楽劇園の募集を知り入園(無償)することになり、卒業式の日の夜行で上京します。十四歳になったばかりのことでした。(神谷 2022 「十代後半の森三郎―川上児童楽劇園時代―」森三郎の作品を読む会会誌『かささぎ』第五号 pp.42-56 に詳細があります。)

「風船虫」は、「私」が小学校へ上がる前に村の夏祭りで見えた軽業小屋に出ていた子どものことを話題にしています。難しい壺回しの演技で壺の中に入ってくるくると回る六歳くらいの男の子は、ちょうど「私」と同じくらいの年恰好です。みんなの拍手喝采とは反対に、「私」はその子がかawaiiそうになります。次の日、町に帰る時にその軽業の子に出会った「私」は、珍しい風船虫の入った瓶を男の子に渡したくて、そっと置いてきます。

『赤い鳥』の同じ号に掲載された「風船虫」「秋蟬」は共に、様々な境遇の子どもの存在を描いています。三郎の表現は社会の矛盾を直接描こうとするものではありません。子どもたちの日常を細かく描くだけでは「学用品やスポンデボールをねだるときと、さほどかはらない調子で」聞いたと書かれていました。それまで進路のことなど考えてもみなかつたごく普通の少年が描かれています。「風船虫」の軽業の興行の様子は仔細に描かれていて、実際に作者が見たことがあるのだろうと想像されます。「風船虫」「秋蟬」という小さな生き物をタイトルにした背景に、子どものこの先を想う作者の優しさが伺われます。「ピアノ」も昭和九年という時代の様相をさり気なく現わしています。東京の音楽学校を中退して帰郷し、郷里の尋常小学校で唱歌の代用教員をしていた吉川先生の話です。先生は、年が離れた「私」の姉の同級生だったらしいと分かります。先生は翌年春には学校を辞めて、朝鮮へお嫁にいきました。亀城尋常小学校で代用教員をしていた兄の森銑三のことがこの話題にもつながっていたのかもしれませんが。

〈次回予定〉 8月は休会。 9月・10月の予定

2025年9月12日(金) 午後一時半〜三時半

「城下町」(季刊『新児童文化』復刊1946年8月)を読む

2025年10月10日(金) 午後一時半〜三時半

「城下町」(季刊『新児童文化』復刊1946年8月) 続きを読む